「私と狭山キャンパス」作品集

帝塚山学院大学

ホームカミングデー実行会議

2021年3月

目次

巻頭エッセイ「私と狭山キャンパス」コンテストに思う
（第十二代学長 津田 謹輔）・・・・・ 3

「私と狭山キャンパス」コンテスト 応募作品

最優秀賞 道しるべの丘狭山キャンパス（飛田 眞知子）・・・・・ 6
最優秀賞 時は流れて（飛田 眞知子）・・・・・・・・・・・・・・・ 7
最優秀賞 狭山キャンパスがくれた絆（大姶良 規子）・・・・・・・・ 7
最優秀賞 私と狭山キャンパス（寒川 綾音）・・・・・・・・・・・・ 8
優秀賞 春の昼下がりに（田中 妙）・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
優秀賞 E棟のピアノ（小野 奈穂）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
優秀賞 私と狭山キャンパス（木原 芽依）・・・・・・・・・・・・・ 11
優秀賞 いつもの場所はE棟ロビー（藤田 はづき）・・・・・・・・・ 12
優秀賞 グッド・バイ、狭山キャンパス！（米田 華慧）・・・・・・・ 13
優秀賞 私を支えてくれた四年間（坂本 后子）・・・・・・・・・・・ 14
優秀賞 私と狭山キャンパス（長谷川 颯）・・・・・・・・・・・・・ 16
優秀賞 季節を感じる場所（矢川 椎菜）・・・・・・・・・・・・・・ 17
優秀賞 静かに舞った最後の桜（杉本 雅子）・・・・・・・・・・・・ 18
一期生として（西 清子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
大学生活の姿（木村 智子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
心のモニュメント（小倉 由恵）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
遠い日の残像（野村 明実）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
心に残った庄野先生の言葉（浦出 弘子）・・・・・・・・・・・・・・ 21
輝かしき私の大学時代（坂本 后子）・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
ー977、私の青春（井上 智恵子）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
私と狭山キャンパス（友広 公子）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
想い出はジグソーパズルのように（猪田 孝枝）・・・・・・・・・・・ 26
若葉祭（猪田 孝枝）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
私と狭山キャンパス（岡田 由珂）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
藪の、中。（西出 祐子）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
あのころの思い出（服部 美穂）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
狭山キャンパスはわが青春のオベリスク（中西 美樹）・・・・・・・・ 29
心に残る狭山キャンパス（服部 祥子）・・・・・・・・・・・・・・・ 30
狭山キャンパスでの大切な思い出（足立 真理子）・・・・・・・・・・ 30
狭山キャンパスありがとう（中川 仁美）・・・・・・・・・・・・・・ 31
私と狭山キャンパス（永長 由衣）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
狭山キャンパスは僕の未来、希望をくれました（藤木 省三）・・・・・ 33
私の狭山キャンパスの思い出（廣﨑 大河）・・・・・・・・・・・・・ 33
私と狭山キャンパス（廣﨑 大河）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
私と狭山キャンパス（長谷川 颯）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
私と狭山キャンパス（長谷川 颯）・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
授業前の疲労（武藤 和奏）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
猛ダッシュ（武藤 和奏）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
狭山の時間（山本 龍之介）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

「私と狭山キャンパス」コンテスト 寄稿エッセイ

私と狭山キャンパス（名誉教授 今西 雅章）・・・・・・・・・・・・ 42
アメリカ・カナダ冒険旅行（名誉教授 川上 与志夫）・・・・・・・・ 44
無料喫茶店になった研究室（名誉教授 川上 与志夫）・・・・・・・・ 45
私と狭山キャンパス（名誉教授・短期大学第十一代学長 鶴崎 裕雄）46
狭山キャンパス（こだはらの丘）賛歌（文学部教授 中尾 芳治）・・ 47
私と狭山キャンパス（リベラルアーツ学部長・教授 永草 次郎）・・ 50
狭山キャンパスの韻致（リベラルアーツ学部教授古田 富建）・・・・ 51

海外に向かって開かれた扉（リベラルアーツ学部教授　溝手　真理）52
私と狭山キャンパス（リベラルアーツ学部教授　安田　政彦）・・53
動物たちの思い出（リベラルアーツ学部教授　伊藤　かおり）・・54
Sayama Campus and Me（Cory Koby）・・・・・・・・・・55
私と狭山キャンパス（リベラルアーツ学部教授　宮坂　康一）・・55
記憶の地層の色（基盤教育機構教授　川越　菜穂子）・・・・・56
私と狭山キャンパス（基盤教育機構教授　杉本　雅子）・・・・・57
鳥と緑のキャンパス（基盤教育機構教授　福島　理子）・・・・・58
狭山キャンパスと私（基盤教育機構教授　三村　浩一）・・・・・59
私と狭山キャンパス（基盤教育機構教授　薬師院　仁志）・・・・60
大階段（教学企画センター　センター長　澤田　悟）・・・・・・61
E棟の校章（教学企画センター　センター長　澤田　悟）・・・・62
G棟ベランダ（教学企画センター　センター長　澤田　悟）・・・・63
思い出をいつまでも（教学企画センター教学課　田中　雄之）・・64

巻頭エッセイ　「私と狭山キャンパス」コンテストに思う

第十二代学長
津田　謹輔

令和３年３月帝塚山学院大学の発祥の地である狭山キャンパスは、長い歴史を閉じる。

４月から大学は、泉ヶ丘でワンキャンパスとして、新しい挑戦をはじめる。

この方針を学長と理事長が同窓会会長に説明申し上げた日のことを良く覚えています。大学同窓会、短期大学同窓会。同窓会連絡会の会長にお伝えしました。一様に驚かれ大変残念がっておられました。最後はこれで大学がよくなるのならと納得していただきました。そのときに、最後の年にはフェアウェルパーティーをしよう、狭山最後の卒業式の前日には大学校歌を作ってくださった南こうせつ氏のコンサートをしようといろいろ提案を受けました。しかし、大変残念ながら、コロナ渦にあってこれらの企画は夢と消えました。

このようななかで、この「私と狭山キャンパス」作品集は貴重なものとなりました。元短期大学学長、名誉教授、そして多くの卒業生や現役の教職員から多くの玉稿をいただきました。

感謝申し上げます。その一つ一つを拝読させていただきました。

タイトルや文章からいくつか拾い上げると、文化・芸術の研鑽の地、どこにいても緑が見える、穏やかなキャンパス、桜の絨毯の大階段、友人との語らいの場、狭山キャンパスは心の友、通学の行き帰りのＥ棟ロビー・・・。

この狭山キャンパスに対するなんとも言えない想いが胸を打ちます。

一人一人にそれぞれの狭山キャンパス。一人一人を包み込んで、何にも言わずに、ずっと見守っている緑の木々や時計棟、長い年月がたってもそのキャンパスのたたずまいは変わることなく、時が経過しても、狭山キャンパスが今でもそしてこれからも一人一人のなかで息づいてくことでしょう。

狭山キャンパスは、購入者によって、介護・医療・再生医療研究所として生まれ変わります。幸い緑の自然や校舎、図書館、茶室などこれからも残っていくと聞いています。

コロナのためロックダウンされたイギリスで、エリザベス女王は、スピーチされました。

そのスピーチの締めくくりを引用します。

コロナが落ち着けば、また会いましょう。We will meet again at Sayama.

「私と狭山キャンパス」コンテスト　応募作品

最優秀賞　道しるべの丘狭山キャンパス

文学部英文学科69年度入学
飛田　眞知子

数十年前の春、淡路島を出て初めてのキャンパスライフは不安しかなかった。「帰りたい。」と思わず言ったこと。眼下に平野を望む高台の静寂な学舎。「待っていたよ。」と穏やかに語りかけてくれたことも気づかずに緊張していたあの頃。寮母さんの優しい眼差しと笑顔の言葉かけ、寮生との語らいを通して心が和んでいった。狭山池での花見。寮外のかえるの声。澄み渡る空を友と眺めた秋。冬の寒さの学食での温かいうどん。バスの窓からの清々しい空気と共に四季折々ののどかな風景など目に浮かぶ。訪ずれる人を拒まずに招き入れ、五感を通してゆったりと包み込んでくれたぬくもりの空間だったと。ひなが成長して巣立っていく過程において恵まれた幸せな温かい四年間だったと年を重ねる度に深く感じます。豊かな環境の懐に抱かれ自然と共生しながら携っていただいた先生方の心遣い。学友達とのつながりし縁。かけがえのない時間を共有できた巡り合えた奇跡だったと改めて感謝の思いで一杯です。様々な未知の体験を通して学ぶ姿勢の大切さや人と出会い接する喜びを知り、多様なものの見方や誇りをもって進めと導き育くんでいただいた狭山学舎。時を超えてもつながりを大切に歩めと目に見えぬ大きな力で進むべき方向へと誘っていただいた学舎。人生への原点、礎であり、母と同じ教師の道へ踏み出すきっかけとなった事。そっと背中を押していただいた道しるべの丘だった。慈み育ててくれた亡き両親と同様に有り難い存在であり、今も支えられ見守られている。人との交流やふれあいを大事に自ら学べとの教えを心に留め高齢者大学の学びに日々精進しています。多くの学院生が感謝の思いを胸にえがき歩み続け、狭山の環境と共に成長し巣立っていったかと考えると感慨深いです。輝かしい伝統は、次世代へと引き継がれ新しい学びの発信に挑戦し続ける学舎。新たな門出を祝し校歌『若き空』を心の糧として益々の発展を淡路のうずしおの丘より祈ります。

最優秀賞　時は流れて

文学部英文学科69年度入学
飛田　眞知子

見上げれば桜満開一面に
　集いし寮生ふくらむ思い
狭山池木々の緑の合間より
　見えかくれする友の笑顔
大空に高くそびえしとけい台
　静かに手招き前へ進めと
さん然とけだかく光る学舎やよ
　聖なる姿我等見守りぬ
いくとせの隔たりありてもよみがえる
　優しまなざし今ここにあり
あれからの日々を見つめて手を合わす
　希望の丘ぞとわに越えらん
時流れ変わらぬ紫苑の恩情に
　無限の幸せ満ちあふれつつ

最優秀賞　狭山キャンパスがくれた絆

文学部英文学科94年度入学
大姶良　規子（旧姓　樋口）

狭山キャンパスがなくなる！

そのことを知った瞬間、私の頭の中は真っ白になった。そして直後にその空白を埋め尽くしたのは、心の奥底にしまい込まれていた大学時代の思い出たちだった。

混雑するバスの中であちこちから聞こえる笑い声。心臓破りの大階段を息を弾ませながら駆け上った友人の笑顔。少し暗い廊下の空気の冷たさ。年季の入った本に囲まれながら受けたゼミの授業。友人たちと将来の夢を語り合った食堂。懐かしい記憶がまるで昨日のことのように脳裏に浮かんだ。

小高い丘に佇む狭山キャンパスは、まるで聖域のようで、雑多な情報に流されずじっくりと自分と向き合うには最適な場所だった。同じ志の友人たちと時には励まし合い、時にはケンカをし、切磋琢磨しながらそれぞれの夢に向かって進み続けた。夢を実現させるために必要不可欠なステップが狭山キャンパスでの日々だった。それは卒業して20年以上経ても、会った瞬間に本来の自分に戻ることができる大切な友人との絆だ。

また、卒業後遠方に引っ越し、知人がいない状態での初めての育児に戸惑っていた私を助けて下さった隣人が、偶然にも狭山キャンパスの卒業生だったという、なんともドラマチックな絆もあった。

私が狭山キャンパスで学んだ日々は、帝塚山学院の歴史からすればほんの小さなかけらにすぎないけれど、今の私の土台を作ってくれたとても大切な宝物だ。

朝日が昇った直後の空のような優しく柔らかな色の校舎と、永遠に続くような美しい緑に包まれた狭山キャンパスは、未来への希望に胸膨らませる私たちを常に温かく見守ってくれていた。
そして、それはきっと狭山キャンパスで学んだ皆の心の中で間違いなく永遠に輝き続けることだろう。

最優秀賞　私と狭山キャンパス

リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科19年度入学
寒川　綾音

この桜の写真は一回生の時、初めて授業を受けた日に撮ったものです。地元では桜を見ようにも学校の隅に植えられた小さな桜ぐらいで、ここまで大きな桜を校内で見たのは初めてでした。
淡い空、校舎の白、ほかの植物、私にはどれも新鮮に写りました。自然溢れるキャンパスでとても素敵だなと感じました。

優秀賞　春の昼下がりに

文学部日本文学科88年度入学
田中　妙（旧姓　北島）

植物の多い校内で、いつも何かしら花が咲いていた記憶がある。庄野英二先生と校内を回りながら、花について話をしたこともあった。

通学には金剛駅からバスを使っていた。朝はすし詰めだし、帰りは疲れて寝ているか友達としゃべっていたので、景色をじっくりと見ていなかった気がする。

ある日、帰りのバスには中途半端な時間になったので金剛駅まで歩く気になった。長い大階段を黙々とゆっくりと降り、下までたどり着いたときに何気なく振り返った。視界に飛び込んだのは、斜面一面に咲くシャガの花だった。ここで咲いてるなんて気付かなかった。しばし呆然と見ていると守衛さんが「自生してる花やし、一株くらい持って帰ってもええよ」と声をかけてくれた。自生しているとはいえなんだか申し訳ない気分になり、持って帰ることは遠慮したが、それからシャガが咲いている間はバスから花をながめることを楽しみに、その後も景色を楽しむようになった。

茶席に飾る花にするくらい素朴で可憐ではあるけど、どこか芯の強さも感じさせるからキャンパスが閉鎖になってもあの花は咲き続けるだろう。

優秀賞　E棟のピアノ

文学部コミュニケーション学科05年度入学
小野　奈穂（旧姓　角谷）

狭山キャンパスがなくなるときいて、まず思い出したのが図書館裏にある枇杷の木だ。大学に入学したてで、まだ友達もいないころ、この枇杷が美味しそうだからとってみようと、おしゃれした女子大生が木を登ろうか、枝でつつこうかとヒールであれやこれやと試した後に、2人とも枇杷は好きではないと知りわらいころげた。彼女とは今でも友達だ。

もう一つがE棟1階にあった古いピアノだ。いつからそこにあったのか、とても古いピアノがあった。G棟のグランドピアノの華やかさと対照的で、曇った音がそのピアノの歴史を感じさせ、私は「おばぁちゃんピアノ」とよんでいた。

そのおばぁちゃんピアノを使って、大学4回の学園祭で、ジャズ部女子で演奏したのは1番の思い出だ。埃をかぶっていたおばぁちゃんピアノの音が、ビオラの深い音色とボーカルの響きに優しい音色に変わっていくように感じた。

数年前に訪れた学祭でも、ジャズ部の後輩たちが同じ場所で演奏していて、自分のしたことが受け継がれていることに喜びを感じたが、誰もそこにあるピアノのことや、そこで始めた理由は知らないだろう。何人の学生がそのピアノを弾いたのか、自分の後にも弾く人はいたのか、ピアノは学生たちの他愛のない話をききながら何を思っていたのか。

もしまだピアノがあるなら最後にもう一度触れたいと思っていましたが、学園祭もオンラインでときき、もう会えないんだなと思うと寂しく思う。

自然豊かで静かなキャンパスで過ごした4年間に思いを馳せながら、最後にもう一度枇杷の木とピアノをみたかったなと思います。

優秀賞　私と狭山キャンパス

リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科09年度入学
木原　芽依（旧姓　谷奥）

狭山キャンパスとの出会いは2008年夏。

高校三年生の時にオープンキャンパスへ参加しました。青く生い茂る広大な芝生、充実した学習環境と広々と明るい学舎に心惹かれ、ここで学びたいと思い入学しました。在学中、狭山キャンパスは四季折々の顔を見せてくれて、心を豊かにしてくれました。その中でも満開の桜の木々の隙間からほんのりと零れる光が大好きでした。何年も付き合える仲間と出会い、恩師に出会い、研鑽に励み、とても充実した学生生活を送ることができました。

2019年春。海外で生活しているときに職員募集の文字が目に留まりました。お世話になった大好きな帝塚山学院のお役に立ちたいと思い、採用選考を受けました。「ご縁がなければアメリカへ帰国」と決めていましたが、採用が決まり、日本に残って帝塚山学院大学で働けることになりました。ワンキャンパス化前にもう一度この環境で過ごせるのはとても感慨深く、嬉しかったです。学生時代、のびのびと学ぶことが出来たのは、この帝塚山学院大学の教職員の皆さんに温かく見守って頂いたからでもあります。

今は学び育ててもらう立場から教え育てることを提供する立場へ変わりましたが、帝塚山学院大学が大好きだということは今でも変わりません。研究室のあるA棟、よく授業で使ったB棟、レポート提出前に沢山通ったC棟、夏はひんやり冷たい空気が流れるG棟、クラブで使った体育館、授業が終わればよく集まっていた購買やソレイユ、緑が生い茂る

中庭など、たくさんの思い出でいっぱいです。レンガ造りの柱が綺麗に立ち並ぶ図書館はいつも待ち合わせ場所にしていました。

この狭山キャンパスには、色々な発見と体験と出会いがありました。慣れ親しんだ校舎が無くなるのは少しだけ寂しい気もしますが、最後まで貴重な時間を狭山キャンパスで過ごすことが出来て本当に幸せです。私の心には思い出の狭山キャンパスがいつまでも輝いていきます。

優秀賞　いつもの場所はE棟ロビー

リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科15年度入学
藤田　はづき

バスに乗って坂を上ると、目に入ったのは、綺麗な建物。バスから降りると、さらに驚いた。

広々とした造り。青々とした芝生と噴水のある庭。ガラス張りのドアから、シャンデリアのあるロビーがちらりと覗く玄関。

「大学言うより、ホテルみたいやなあ」

隣にいた父が、そう呟いたことを覚えている。

オープンキャンパスで、初めて狭山キャンパスのE棟を見たときのことだ。一人で行く勇気が出なくて、父に同行してもらっていたのに、まだ緊張していたように思う。

「お前、ほんまに行けるんか？」

入試に合格してから、父がそんなことを尋ねてきた。家から電車とバスで片道二時間かかるので、そう思うのも無理はない。

「大丈夫！　行くって決めたから！」

が、入学式。スーツに合わせた慣れないヒールで行ったせいで、靴擦れしてしまった。泣きそうになりながらE棟のロビーにあるソファに座り、後ろ向きなことばかり思い浮かべる始末。

「ほんまに四年間やっていけるんかな……」

そう考えてしまうと、綺麗で素敵と思っていたキャンパスが、途端に冷たく感じられた。

さらに、一回生の必修科目や資格の講義は、大体一時間目。大学の送迎

バスに揺られながら、眠気に堪えていた。
朝、送迎バスはE棟の前に停まる。ロビーで少し休憩してから教室に行った。しばらくぼーっとして、シャンデリアを眺めて。ああ、そろそろ行くか、と、のそのそ教室まで向かう。暑くても寒くても、いるだけで落ち着いたり、人感センサー付きの照明がすぐ消えるのを面白がったりして。
これを繰り返していくうちに、次第に慣れて、四年間無事通うことができた。
卒業式、同じようにロビーのソファに座ったときの気持ち。いつのまにか当たり前になっていたことも、もうできないのだ。
穏やかだけれど、どこか寂しい。キャンパス統合の話を聞いたとき、同じように感じた。
いつの間にか日常になっていたあの場所は、いつまでも私の中に残ってはいるけれど。

優秀賞　グッド・バイ、狭山キャンパス！

リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科18年度入学
米田　華慧

狭山キャンパスは「心の友」である。私はこのキャンパスのおかげで、大学が好きになった。狭山キャンパスは高校時代に傷ついた心を、優しく癒してくれたのだ。
私はここで、数えきれないほどたくさんの思い出ができた。先生から専門的な話を聞くのが楽しかったこと、友達と広い芝生を走りまわったこと、夏休みなのに毎日大学に来て勉強していたこと、放課後に部屋を貸しきって一人で楽器の練習をしていたこと。そして、先生の部屋の前を我が物顔で闊歩していたのは、良い思い出である。
私は、二十一年間の人生で、後悔していることが一つある。それは、高校三年生のときに「帝塚山学院大学」を知らなかったことである。大学が統合されるという話を聞いたとき、「あと一年はやくこの大学を知っていれば、四年間このキャンパスで過ごせたのに……」と、とても残念な気持ちになった。
今年はコロナの影響でほとんど大学に行けなかったが、来年泉ヶ丘キャンパスに統合されれば、狭山キャンパスのことは忘れ去られてしまうのだろうか。
いや、個性的な友達や優しい先生方と出会った「狭山キャンパス」を、私は一生忘れない。
ありがとう。そして、グッド・バイ、狭山キャンパス！

優秀賞　私を支えてくれた四年間

文学部英文学科75年度入学
坂本　后子（旧姓　中島）

偶然の出会いから始まった友。入試でご一緒になり、「頑張ってね」と声かけしてくれた彼女が、入学初めて隣で、又出会いました。ご縁の不思議を感じます。

今は亡き親友。出席簿も誕生日も偶然前後で、始まった友。随分、お世話になりました。

茶道部での思い出です。おけいこは足がしびれて…
いつのまにか慣れましたが、楽しい試練の場所でした。

妹が入学してきました。
私３回生、妹１回生の春です。

優秀賞　私と狭山キャンパス

人間科学部情報メディア学科18年度入学
長谷川　颯

当時、1年だった私と学友が道に迷い行き着いた窓。E棟の2階の窓の1つだがE棟の2階は昼間電気がついておらずその窓から日光が漏れており思わず足を止めた窓。

優秀賞　季節を感じる場所

人間科学部情報メディア学科18年度入学
矢川　椎菜

泉が丘キャンパスがメインだった私が一年生の頃に思い出に残っている場所はC館です。春は友達と木漏れ日を見ながら食べたお弁当。夏はギラギラした太陽が教室にまで照りつけ、秋は綺麗な紅葉を上から眺め、冬では暖かさを求めてガラスの近くへと寄り、よく友達とたわいもない話をしながら陽の暖かさをもらっていました。今回は「秋」の紅葉とともにC館に木漏れ日が差し込んでいる様子を写真に収めました。

優秀賞　静かに舞った最後の桜

基盤教育機構　教授
杉本　雅子

一年、また一年、来る年も来る年も新入生を見守り、新入生のためにピンクの絨毯を織ってくれた狭山キャンパスの桜。学年暦を透かして見える大階段のにぎわい。2020年4月もそのはずだった。4月7日、私は30年間のお礼を胸にキャンパスに出かけた。満開から散り際を迎えた桜たち。キャンパスの静けさにせつなくて胸があつくなった。ありがとう。そして…
…さようなら。

一期生として

文学部日本文学科66年度入学
西　清子（旧姓　井上）

ついこの間、帝塚山学院大学五十周年記念誌が発刊され、今回の狭山キャンパスが泉ヶ丘キャンパスに統合されることを知り、驚いています。

一期生として、金剛駅に降り立ち、緑深いバス道から、小高い丘の白い建物が見えると、やっと着いたとの思いと真新しい建物の清々しさが思い出されます。

半世紀以上の月日が流れたことが信じられない程、当時の学友達との語らいが、よみがえってまいります。

あの四年間があって、万博のコンパニオンとして、大阪万博に参加できたことは、私の宝物です。

確かに狭山の地に私達の学舎はなくなるかもしれませんが、私の中、皆様の記憶の中にはいつまでも残されていくことでしょう。ありがとうの思いと一緒にね。

大学生活の姿

文学部英文学科70度入学
木村　智子

今から思えば、大学生活はとても有意義だったと思います。豊かな自然環境の中で、学ぶことの尊さを感じました。社会生活に生かせる人格育成を養う大学生活は、人間同士の交流も大切だったと思います。これから、又、今正に大学生活を営む皆様に、すばらしいドラマが訪れます様、愛のエールを送ります。ありがとうございました。

スクールバスの送迎は今までと違った登校でしたが、楽しかったです。

学食はシンプルなメニューが多かったですがおいしかったです。

講義は、先生方の豊かな発想もまじえて、よくわかり、親切に指導して下さり、有意義な内容でありました。

友達は、地方の出身の人もいらしたので、今までと違った接し方が出来て、幅のある心のあり方を学ぶことが出来ました。

心のモニュメント

文学部日本文学科72度入学
小倉　由恵（旧姓　平波）

建造物がなくなれば、その面影を胸に遺したものにとっては心の中の記念碑となる。

狭山の丘のキャンパスが、来年度その役割を終えるとのこと。その役目が、失われてしまい非常に残念に思う建物がこれまで二棟あった。私の心のモニュメントともいうべく。

その一つは、志賀高原ホテル。叔父に連れられ一九六六年一月だったか。初めてのスキーに。たまたまだったのか。一夜ロビィでバンドの生演奏があった。石造りの暖炉。絨毯は緋色だったか。二階の部屋の前の回廊から手摺にもたれて眺めている私に叔父が囁いた。あのダンスしてる男の人が、岡本太郎やでと。まだ大阪万博までは間があり、太陽の塔の作者だと知るのは後のこととなる。でも、とても個性的で、幼心にもただびとでないことは知れた。雪景色の外観は朧だがクラシックホテルの威厳とあのロビィは忘れ難い。

いま一つは、野尻湖ホテル。ここは、大学在学中の大橋ゼミ夏合宿の定宿。私達同窓は、一九七四、五年の二夏を過ごした。日本文学中古、とくに和泉式部の研究で夙に知られておられた大橋清秀先生の薫陶を受けるべく？句会、散策、論文の中間報告などに時間を費やした。どの部屋からも野尻湖が見え、かつて美智子皇太后様がご静養されご快復されたホテルでもあった。萱葺き屋根の和と壁の洋とののどやかな佇まいは、消えた。

さて、加えてこの度は狭山キャンパスが幕を閉じる。在学当時、実家が金剛にあり通学は駅まで徒歩で行けば、スクールバスに乗るだけ。白地に水色のバスは親しい存在。ある時は、霊感占いで人気の田中佐和先輩と同乗もした。日文の研究室で予習の下調べ、境田先生の研究室でのブルーマウンティン珈琲。体育では、ソーシャルダンスやゴルフを女性の嗜みとして。ジルバは今でも踊れる。はず。庄野先生の植樹のお手伝いをしたユーカリの木は、まだ残っているのだろうか。見届けに行くはずの約束は果たせない。ただ、淋しい。

遠い日の残像

文学部美学美術史学科74度入学
野村　明実（旧姓　島田）

狭山の丘に建つ校舎、大階段、坂を登れば明るく気持ちの良いポーチにたどり着く。くも膜下出血で今もリハビリ生活を続けている私の脳にも、今も鮮明に蘇ってきます。

葡萄祭で私たち放送部は、ＤＪ喫茶を成功させました。放送部部長として毎日ホールで行われた「帝塚山学院創立60周年記念」公演で詩を朗読させて頂いたことを昨日のことの様に思い出します。

狭山の校舎に励まされ、夢と希望をいだいて過ごした4年間でした。

長い間たくさんの女性の夢と希望をずっと見守って大きく包んでくれていた校舎に「ありがとうございました」のことばを添えて、そっと静かに見送りたいと思います。

私達卒業生も校舎も、これからの帝塚山学院の益々の発展を望んでいることを最後とします。

心に残った庄野先生の言葉

文学部日本文学科74度入学
浦出　弘子（旧姓　波多野）

思えば、すでに私は、小学生のときに、親戚の人に貰った「雲の中のにじ」という本を通して、児童文学者の庄野英二先生に出会っていた。

大学に入ると、庄野先生が、教授陣の一人としていらっしゃった。校舎のあちらこちらに、先生の描かれた絵が掛けられていることに気がついた。どの絵も色彩がカラフルで明るいことが印象的だった。

先生は、近代文学の担当だった。私は日本文学科に入学したからには、古典を勉強したいと思ったので、先生の講義を一つ選択しただけだった。

その講義の余談で「世の中が、皆、頭を剃って、そこに絵を描くという風習になったらいいなと思います。そしたら、僕は毎日違った絵を頭に描いて出かけられてどんなに楽しいか」とおっしゃったことを鮮明に覚えている。

講義の内容は、先生の指定された本を一冊、一週間で読んで行き、その本の感想を発表するというものだった。

ある週に、先生は、北条民雄の『いのちの初夜』と題された文庫本を指定された。表題作の一篇というよりも、本全体を読んでの感想だったと思うのだが、私は手を挙げて「構成に未熟なところがあるように感じました」と生意気なことを言った。

すると、先生は、ニコニコしながら「私の知っている料理人さんはね、材料七分に腕三分と言われるのですよ」と答えられた。

そして、当時、社会から忌み嫌われ、不治の病とされたハンセン病にかかった作者が、絶望的な状況の中で書いたという事実の重さについて、し

ばらく話して下さった。私は返す言葉がなかった。
何十年も経った今も「材料七分に腕三分」という言葉を、折に触れては、庄野先生に教えていただいたなあと思い返している。

輝かしき私の大学時代

文学部英文学科75年度入学
坂本　后子（旧姓　中島）

金剛駅からスクールバスに乗って10分程、山を上がって行くと高台が見える。長い階段を登りつめると、そこには我が大学の時計台が見える。よく、この階段で写真をとったものです。そのお隣りを少し歩くとお茶室があります。私は茶道部に入って放課後、よくおけいこに通いました。私にとって初めてのお茶道は、なかなか覚えられず大変でした。同級生や先輩方、先生方に教えを受けながら、お点前やお行儀の心得などを学びました。足のしびれもいつしか忘れた頃には、少し上達して、やっと一人でお点前できるようになっていました。この時の嬉しさといったら他、ありませんでした。聖山での夏合宿、思い出すと懐かしく、試練も今となると良き思い出。

帝塚山のキャンパスは緑がいっぱいで、図書館に通じる道辺には、白いパーゴラから、ぶどうのつるが垂れ下がっていたような記憶が蘇えってきます。その下のブランコに腰かけて、お友達と楽しい語らいを繰り返しました。

帝塚山学院内は、美人できれいな女性が多く、うっとりみとれていました。お嬢様達はおしゃべりも品があり、癒やされました。

寮生活をしていた私は、夜中の座談会に参加すると昼間は眠くて、授業中よく居眠りをしてしまいました。いつも「心理学」の講義の時で、ついつい睡魔におそわれてうとうと。ハッと気がついてよだれをふきながら目覚めると、隣から、

「ハイ！よく眠ってたからノートとっといたよ。」テキストに目をやると

書きこみが。親友の理栄さんには何度もお世話になりました。今、彼女は遠い天国にいます。

古いアルバムの中には、私の若き日の輝かしく眩しい時が刻まれています。

ここで学問を学び、たくさんのお友達に出会い、先生方から教えを請い、私を育ててくれました。若き日は遠い昔になりました。が、素晴らしい、貴重な時、大学時代です。

1977、私の青春

文学部日本文学科76年度入学
井上　智恵子（旧姓　奥谷）

1977年秋、私は2回生、まだ10代。今は60代。この写真は、演劇研究会の毎年恒例の学内公演「ゼロ弾きのゴーシュ」。公演の後、廊下で撮った写真です。毎日放課後、練習をしました。帰りに金剛駅のパーラーでよく先輩にごちそうになった事、楽しい思い出です。

この写真は昨年実家を解体することになり実家のアルバムで見つけました。私は今シニア演劇で、又青春しています。劇研の先輩！後輩！皆さんお元気ですか？

私と狭山キャンパス

文学部英文学科77年度入学
友広　公子（旧姓　日比野）

入学した1977年は、女子の4年制大学進学率は僅か16％。「6人に一人しか大学に行けない」という事実も知らずに、狭山キャンパスで華の女子大生生活を始めました。

葡萄山の頂上に聳え立つ「パルテノン神殿」とも「修道院」とも言われた学舎目指して、大階段を横目にスクールバスが坂を上ります。降り立ってみれば、そこには緑の芝生と華やかな女子大生に負けじと咲き誇る花々。ニュートラに身を包んだ学生たちがヒールを鳴らして教室に急ぎます。

本当に恵まれていました。優秀な先生方、最先端の設備。例えばＬＬ教室での「通訳授業」。英語が好きだったわけでもないのに英文科に入った私でも、留学することができました。「情報」ではプログラミングを習い、ワープロの前身に触れ、「英文タイプ（死語ですかね？）」で覚えた入力の速さと正確さは今も自慢です。アンカー英和辞典の編者名に小林清一先生のお名前を見つけ、「うわー、今、私の目の前で講義してはる先生や」と知った時の驚き。広い芝生を使っての体育の授業はゴルフ。まっすぐ飛ぶことを知らない私のボールは池ポチャも数知れず。「社交ダンス」は背の高い私は男役で、覚えたのは男性のステップだけ。残念。前任校が学生運動の盛んな大学だった某先生は「君たち、ここは天国だよ。中庭には花が咲き乱れ、学生とすれ違うと香水の香りがする。」と何度もおっしゃいましたが、先生、天国しか知らない住人には天国のありがたさがわからなかったのです。

そして須賀有賀子先生。ランバンのスーツに身を包み、現代女性英文学について熱く語られたそのお姿は憧れでした。ひょんなことから、ゼミで研究していたマーガレット・ドラブル氏を日本にご招待したいということになり、怖いもの知らずのゼミ生たちが、大学の英米文学会を巻き込んでの招聘活動が始まりました。インターネットもメールもない時代、ブリティッシュカウンシルに手紙と電話で、時には直接出向いての交渉。京都や神戸の女子大にも声をかけ、ドラブル氏の来日と講演にこぎつけました。私はドラブル氏の来日と入れ替わるように留学してしまったので、お目にかかることはできませんでしたが、講演会も盛況で、狭山キャンパスのお茶室やゼミ生の京都の別荘にご招待して歓談されたと聞き一安心したのを覚えています。

卒業して40年近く経ちました。女子大生のバイブルと言われたＪＪが今年、月刊発行を休止するそうです。大学入学の頃に月刊となり、キャンパスには取材のカメラマンが訪れて、あの大階段や桜の木をバックに学生の写真を撮っていました。「今月は誰が載ってるの？」とみんなで読むのが楽しみでした。今も「狭山キャンパス」と聞くと学生の笑いさざめきと、怖いもの知らずのパワーが脳裏に蘇ります。

想い出はジグソーパズルのように

文学部英文学科78年度入学
猪田　孝枝（旧姓　広田）

さかのぼること、約四十年前、私は田所ゼミの一員として、卒論制作に励んでいた。

当時、先生は和歌山大学の名誉教授という肩書で、退職後帝塚山学院に招かれたと記憶している。ループネクタイがとてもお似合いで「紳士」という言葉がぴったりの方だった。誰よりも早く研究室に行き、常に先生の隣の席で受講することは、この上のない至福の時間だった。

卒論のテーマはゼミが始まる前から決めていた。それは、スタインベックの「エデンの東」。先生が参考資料として、過去の卒業生の論文を見せて下さったが、誰一人として書いていなかった。難しいテーマなので、先生がどう思われるか不安だったが、それとなく相談すると、意外にも快く承諾して下さった。

私のように、真摯に受講するゼミ生が大半だったが、中には何をしに大学に通っているのか、理解しがたい学生が数人いた。講義中先生の話も聞かず、おしゃべりに夢中になったり、遅刻は日常茶飯事で悪びれる様子など全くなかった。こういう学生のことは気になりつつも、卒論を完成させることだけを考え田所ゼミの最後の学生として恥じぬよう、講義に集中した。

私にとって、本当の大学生としてのスタートはゼミから。それまでは、なんとなく、しっくりこない大学生活を送っていた。田所先生と出逢って、ようやく大学生になれた気がする。

ジグソーパズルにたとえると、先生との出逢いが最初の一ピース、講義が進むにつれ、はめ込むピースも徐々に増えていく。やがて卒業をもって、一つの作品が完成する。切り取られたピースの形が違うように、それぞれに想い出が詰まっている。最後にはめ込むピースは先生との想い出。

狭山キャンパスがなくなってしまうことは悲しいけれど、心の中に完成したジグソーパズルの想い出は決して消えることはない。

若葉祭

文学部英文学科78年度入学
猪田　孝枝（旧姓　広田）

漫才ブームに湧く中、当時は五月に開催されていた大学祭「若葉祭」に、ザ・ぼんちが招待されるということで、体育館は人・人・人の波。望遠レンズもない普通のカメラで撮った一枚。ピンボケだけど、私にとっては最高の写真。

四十年前は写真を撮るのもひと苦労。スマートフォン一台あれば、なんでもできる現代とは違って、人間味あふれる時代だったように思います。

私と狭山キャンパス

文学部日本文学科82度入学
岡田　由珂

それは私にとって片道二時間半の小旅行でした。その頃の私には堅苦しい家から解き放たれる素敵な時間。自由な大学生活を満喫出来誰にも咎められず遠慮なく自分だけの時間を持てる事が出来たのですから。京都から通学と聞くと皆さん驚かれ「何時間かかる?下宿したらいいのに。」

阪急電車、地下鉄御堂筋線、南海高野線、最後は駅から大学までのスクールバス。バスの中はほんのりシャンプーや香水の香りで街の満員電車とは雲泥の差、女子大ならではです。

キャンパスに着くと殆んどが大阪の人で京都人のように陰湿さ嫉妬がなくてみんながみんな笑い飛ばす文化がとても心地良くすんなり馴染んでいきました。まるで大学の広々とした芝生にボールが弾むような感覚は今もはっきりと覚えています。

体育の授業のゴルフは青空の下で、お昼の食堂は女の子達のカフェと化し、空きコマは図書館で一人の時間に浸る。私にとって狭山キャンパスは人生で初めての居心地の良い場所でした。ただ一回生の時の一限のフランス語と心理学がつらかった事以外は…。

来年二〇二一年が来ると移転し母校が無くなってしまいますが卒業して三十数年経てもまだ尚続く友人関係はキラキラしたあの頃の思い出にプラスされ色彩の筆を重ねる油絵のごとく鮮明に色褪せることはないでしょう。

いつまでもｔｏｕｊｏｕｒ（永遠に）。

藪の、中。

文学部日本文学科82年度入学
西出　祐子（旧姓　山岡）

贅沢な場所だった。決まりきった形に刈り込まれる木も部分的にはあったが、大抵は緩く自由な枠を持つ樹木たち。そこから、花の向きが都合良いものを、遠慮なく切り取り茶室の花入れにさす。週二回、茶室で茶道部の稽古が行われる度に、当番が床[とこ]をしつらえる。

当番に当たって鋏を片手に、緑の中に色は無いかとキャンパスをうろつく。ーー思い返せば今で言う不審者風情だが、花を探す乙女としてご容赦……、ここで「花摘」を使おうとググると「女性の小用」に使うと出る。小学生から辞書は引いていたが、大学で更に、連想ゲームのように調べていく楽しさが身についた。時を戻そうーー　茶室付近の椿が咲く頃は楽なのだが、暑い季節は大変。暑さと、眩しさと、先生にみて頂くまでのドキドキな不安感。そんな謙虚な自分がふとよみがえる。

新しい手習いが始められるのも、あの豊かな藪の中に身を置いたお蔭だ。ご縁があったことに感謝しつつ、合掌。

あのころの思い出

文学部日本文学科85年度入学
服部　美穂（旧姓　橋本）

四半世紀以上も前に、帝塚山学院大学文学部日本文学科に入学しました。ずっと公立の学校で育ってきた私にとって、まわりの学生たちの、なんとキラキラして見えたことか…。一生懸命、キラキラの仲間入りをしたいと背伸びしましたが、今思えば、無駄な努力だったような気がします。

庶民の家庭の子供である私は、経済的なことだけでなく、当時、家族の問題も抱えていて、表面的には明るい女子大生を演じていましたが、心の中は色々としんどいことが多い学生時代でした。

人生もすっかり後半になった今は、おかげ様で、身の丈に合った幸せな生活を送っています。

そして、授業で習った曽根崎心中の文楽を観劇したり、坪内稔典先生の新聞のコラムを楽しみにしたり、自分でも自由句を創作したり…と、帝塚山学院大学で学んだことが、日々の生活を、決してキラキラではないものの、とても心豊かにしてくれていると実感しています。

狭山キャンパスの近くに住んでいるので、いつでも訪ねることが出来ると思っていましたが、まさか、そのキャンパスがなくなってしまうとは、本当にさびしいです。

若くて、感受性の強い時代の4年間を過ごしたキャンパスのことは、大切な思い出として、これからも心の中のアルバムにしまっておきます。

狭山キャンパスはわが青春のオベリスク

文学部日本文学科86年度入学
中西　美樹（旧姓　米井）

最初、キャンパスを見た時は、こんもりとした緑が、生い茂り、まるでお城のようだと思った。

すりばちの様な形の階段教室は、いかにも〝大学〟という感じがした。

中でも、大谷晃一先生の、一般の女性の人生を語っていただく授業が、印象深い。先生は、確か、元新聞記者ゆえに、実在に基いての話で、一人の女性として、大変、興味深かった。

坪内稔典先生の、短歌や俳句をつくる授業も楽しかった。授業の終わりに、皆の歌を、本にしてくださった。青春のひとときを切り取ったものになり、大切に置いて、ときどき見返している。

わが子が、大学生となった時、より一層、大学生活が、思い起こされる。

今回、統合される事で、寂しいが、私の心の中では、いつまでも、オベリスクの様に輝やき続けていくであろう。

心に残る狭山キャンパス

文学部日本文学科87年度入学
服部　祥子（旧姓　延与）

4年間通った狭山キャンパス。一番心に残っているのは、やはりスクールバスで毎日通ったことです。私が通ったのは昭和62年から平成3年の4年間。まさにバブルの時代でした。派手めの服にヒールをはいて、まさしく女子大生といういでたちの帝塚山学院生でしたが、スクールバスと電車の行き来は皆、ヒールをならしながらも全力で走っていたことが今となっては良い思い出です。

スクールバスで大学の長い坂を上がった先にある緑いっぱいの中庭はこじんまりとしたキャンパスながらも落ち着ける場所そのものでした。学生掲示板、普通教室、大教室、食堂、図書館が日々の動線だったように思います。大学の周りには何もなかったため、ほぼ大学の中だけで過ごしました。逆にそれが友達と長く時間を過ごすことにもなり、充実した学生生活を送れたのではないかと思っています。

また、キャンパス内に広大な芝生があったことも狭山キャンパスの魅力だったと思います。体育の授業の時にゴルフをするというのも帝塚山学院ならではでないかと思います。

昭和から平成に移る激動の時代を帝塚山学院大学の狭山キャンパスで過ごせたことは私の人生の中で忘れられない出来事であり、貴重な経験だと思っています。狭山キャンパス統合は残念ですが、私の中では青春の大学時代と共に狭山キャンパスはいつまでも残り続けることと思います。

狭山キャンパスでの大切な思い出

文学部国際文化学科89年度入学
足立　真理子（旧姓　北田）

満開の桜並木をくぐり抜け迎えた入学式の感動を今でも覚えています。私にとって狭山キャンパスは、いろいろな経験をした思い出の場所でもあります。

オーストラリアに興味があった私は、国際文化学科のオセアニアコースを専攻しました。先生方も個性的で面白く、色んなお話を聞きたくて、研究室に伺うのが楽しみでした。

そして、大学に入ったんだから何か資格を取りたいと思い、教員免許や図書館司書の資格を取得し、日本語教員養成コースを修了しました。努力をすれば必ず成果があると自信がつき、前向きに頑張れる様になりました。

また、入学当時、テニス部を作りたい！と、一人の先輩が声を掲げ、昔大学で指導していただいていたコーチに指導を頼み、集まった部員でコートを整備し、テニス部を作りました。とても大変でしたが、とても楽しかった思い出です。合宿もかなりしんどかった思い出がありますが、それ以上に楽しい思い出も沢山出来ました。初心者の私達を根気よく指導してくださったコーチにとても感謝しています。

学生時代の友達は、久しぶりに会っても、昔と同じように話が出来るかけがえのない友達です。これからも会えば、大学時代の思い出話に花が咲くことと思います。

思い出の沢山詰まった狭山キャンパスが無くなるのは寂しい事ですが、この大切な思い出はしっかり胸に、記憶に刻んで、大切にしていきたいと

思います。これからは泉ヶ丘キャンパスで学生の皆さんに素敵な思い出を沢山作ってほしいと願っております。

狭山キャンパスありがとう

文学部日本文学科00年度入学
中川　仁美（旧姓　松阪）

帝塚山学院が泉が丘キャンパスに統合されると聞いて、大学生活の思い出が改めて蘇ってきました。

私の中で大学生活四年間は宝物のように色鮮やかに残っている。ふとした時に思い出すことは素晴らしい思い出ばかりだ。今は3人の子の親となり、子供が成長していくことの喜び、時には辛さを味わっている。

振り返ってみて、文学部日本文学科だった私には狭山キャンパスの思い出しかないのは当然のことである。歴史ある講堂での授業、部活やサークルで友と笑い合って過ごした日、カフェアンシャンテ、文化祭、そして横川先生のゼミの授業、楽しかった東京ゼミ旅行、お世話になった先生たち。

挙げたらきりがないが、狭山キャンパスにいる私はいつも笑っている。悩みなんかあったのだろうか。今思うと人生で贅沢な時間を味わえたと思う。大学に行かせてくれた両親にも感謝しかない。

思い出の狭山キャンパスがなくなってしまうのは寂しいですが、あのまばゆい季節はずっと心に残っています。慌ただしい生活の中で元気をもらえる思い出です。狭山キャンパスを忘れられません。あの時に大学に通えて本当に良かったと思っています。

泉ヶ丘キャンパスが帝塚山学院にとってさらなる飛躍になることを祈念します。新しく歴史を紡いでいって誰かにとっての、素晴らしい泉ヶ丘キャンパスライフになることを願ってやみません。

私と狭山キャンパス

文学部コミュニケーション学科06年度入学
永長　由衣

数年前。狭山キャンパスが閉鎖されると知ったとき、驚きました。食堂を改装してからまだ10年と経っていなかったこともあったし、まさか母校が閉鎖されるとは。最初は中々信じられませんでした。学び舎が閉鎖されるってこんな感情なのか……という感覚でした。

友達と過ごした色々な風景を思い出しました。E棟フロア。階段の赤い手すり。窓から見える噴水。学食と販売。学生相談室。図書館。ゼミ研究室。講義教室。G棟の大教室。その5階で「若草物語」の講義を受けた思い出。（先生も皆も元気かな）狭山キャンパスに対しては、私は何だか人のように見ている部分もあります。

その出会いは高校三年生の夏。児童文学の専攻科目があると知り、「ここに入学したい！」と直観したのが始まりでした。

しかしその後、人間関係での大きな痛手があって、入学後の四年間は頭がすっかりそれに取り込まれてしまっていて…。本当のところ、あまり大切に過ごすことが出来ませんでした。なので、どうしても少し、「大切に出来なかった人」みたいに思ってしまう面があります。今の心境で通えていたら、一体どうなっていたかな？ちょっと『香水』の歌詞の様な気分になります。（笑）至らない学生でした。

最後に。狭山キャンパスに言葉を贈るとするのなら、感謝を伝えたいです。

”長い間、お疲れ様でした。あの四年間を、大切に出来なくてごめんなさい。気持ちの拠り所になってくれて、ありがとう。あなたが居たことを、忘れないよ。時間がかかってしまったけれど、これからは自分の幸せに対して、もっと素直に生きるね。大切な思い出をくれて、ありがとうございました。“

狭山キャンパスは僕の未来、希望をくれました

リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科16年度入学
藤木　省三

ぼくは子供の頃より持病の喘息で、苦しんできました、26才位まで入退院の繰り返しでした、専門病院に替わってからよくなり、それから35年ぐらい仕事頑張ってきました、64才になって仕事が無くなったのを、期に高卒程度認定試験を受け、本大学の一般入試で合格し、リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科に4年間かよいました、絵本制作や児童文学の授業を受けるなかで、絵本を制作しました、3回生の春に絵本出版しました、全国販売です。卒業してから、今年の8月にも一冊出しました、その絵本が10月1ヶ月間全国20店の書店で展示販売されました、だから僕にとって狭山キャンパスは僕の希望 未来をくれました、ありがとう狭山キャンパス。

私の狭山キャンパスの思い出

リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科17年度入学
廣﨑　大河

私は2017年4月に帝塚山学院大学リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科に入学し、入学式当日はあまり初めて会う人が多いので最初は友達になれるか不安でした。

入学式終わったらリベラルアーツ学部の人と会話をしたりして絆を深めて行きました。1回生になってからは90分授業が初めての時間で長く感じたけど授業に集中出来て、その後からは90分があっという間でした。1回生の時は教室の場所が分からないこともあったけど分からない時は先輩に聞いて教えてくださいました。

2回生になったら勉強も段々と難しくなっていき、自分のペースに付いていけるか不安でした。でも、授業の先生が細かく指導してくれてありがたかったです。2回生になって部活動に入部しました。書道に入部し、書道部の先輩方に色々と教えてくれました。葡萄祭の当日書道部の皆で準備した作品を飾って色んな教職員の方々や在学生の人も見に来てくれました。

3回生になったらゼミの授業が始まり、私は歴史専攻でしたので安田先生には色々と分からないことは教えてくださったりして、ゼミでのレポートを提出したら先生が添削をして下さってどういう風に直したら良いかと細かく教えてくださいました。

4回生では就活も始まり、卒業論文も書き出す頃だと思います。就活ではキャリアセンターの先生方が模擬面接の相手をして下さったりして、他にも履歴書の書き方や自己PR等を教えてくれました。4回生では卒

業論文に取り組む事ですけど、ゼミでの先生には2回生から4回生までゼミで色んな事を学ばせて頂きました。

帝塚山学院大学の先生方色々と分からないことは教えてくださったりして、嬉しいの一言です。

私と狭山キャンパス

リベラルアーツ学部リベラルアーツ学科17年度入学
廣﨑　大河

撮影した写真の気持ちは現在4回生なので1回生から4回生まで登校した学校が終わってしまうのが寂しいです。

私と狭山キャンパス

人間科学部情報メディア学科18年度入学
長谷川　颯

G棟のエレベーターホールの入り口の花壇に植えられた小さなサボテン。1年中あり登校中に毎回見てはなぜここに植えているのか、なぜサボテンなのかと考えながらエレベーターに乗る。

私と狭山キャンパス

人間科学部情報メディア学科18年度入学
長谷川　颯

当時、1回生だった私は朝の授業が鬱でこの廊下を通るときに気持ちを切り替えていた。また、高校の廊下に酷似しており時折懐かしさを覚えた。

授業前の疲労

人間科学部情報メディア学科18年度入学
武藤　和奏

B棟の階段です。1年生の時教室が4階でこの棟にはエレベーターがなく階段を必死に登り下りをしたことが大変でした。撮影のために階段で登りましたが2年前より4階が遠く感じました。

猛ダッシュ

人間科学部情報メディア学科18年度入学
武藤　和奏

芝生グラウンドから見たキャンパス間専用バスの写真です。私はよくキャンパス間を移動していました。いつも泉ヶ丘キャンパスへ帰るバスの発車ギリギリに乗り込むことが多く、ここから急いで向かった思い出があります。

狭山の時間

人間科学部情報メディア学科18年度入学
山本　龍之介

私は狭山キャンパスに行く機会が少なかったのですが、いつも狭山キャンパスに行った際に必ず寄っていた場所があります。それは、図書館です。狭山の図書館は泉ヶ丘より広々とした空間で蔵書もパソコンも多くあり、外の緑も見えて、自習や休憩がしやすく空きコマにはいつも利用していました。

泉ヶ丘の図書館とはまた感じが違ってゆっくり出来る図書館でいいなと思いました。図書館に行くまでにある支柱の感じも好きでした。

「私と狭山キャンパス」コンテスト　寄稿エッセイ

私と狭山キャンパス

名誉教授
今西　雅章

当時、同志社大学の学長だった上野直蔵先生のご推薦で、新設の帝塚山学院大学の文学部に助教授で迎えられた。文学部所属というのは嬉しかった。英文学の専門科目を教えられるからである。開学初日、大学専用のブルーの洒落たバスから降りると、そこに学院長の森磯吉先生が立っておられ、私の手を強く握りしめて、「よい大学にして下さい。すべては、先生方の力にかかっていますからね」といわれた。

最初の教授会で、ほぼ全員の先生のお顔を知った。文学部は、日本文学科、英文学科、美術・美術史学科の三つから成っていて、一、二年の学生対象の教養コースが設けられていた。先輩教授組は穏やかな紳士であった。原龍之助教授、源豊宗教授、望月信成教授などがおられ、長沖一先生は文学部部長、庄野英二先生は学監であった。英文学科には田辺先生とか櫻井先生がおられたが、在任は短かかった。小林清一先生と西台美智雄先生が英文科の学科を引っぱって行って下さることになる。小林先生は実力のある方で、辞典編集の大家で、三省堂や学研の英語辞典の監修者であった。『アンカー英和辞典』もその一つである。西台先生は心のやさしい方で、K・マンスフィールドの短篇集を英宝社から訳出しておられるのでも分かる、少しひょうきんな感じのする名物先生で、蔭で「仏（ほとけ）の西台」と学生に呼ばれておられた。

大学全体が和気藹々とした雰囲気が漂っていて、「月見の宴」がキャンパスの屋上で行われた。源豊宗教授は美術史の権威だけに、「月」の象徴について一席やって下さり、感銘深かった。

第二年目から、西本三十二先生が、国際基督教大学から学長として迎えられた。

その頃はまだ珍しかった大学における視聴覚教育の第一人者で、ＡＶセンターをさっそく狭山キャンパスに設置された。この新しい教育法に暗い先生方の抵抗もあったが、私はこの手法に賛成であった。ビデオを授業で利用することによって、私の教えるシェイクスピアや英国小説の授業はよみがえった。教育教材のなかに、若桑みどり氏の美術や樺山紘一氏のルネッサンスなど、なかなか充実した内容のものがあり、授業の途中で学生に観せた。ＢＢＣのシェイクスピアも大変有益で、原典を読み、映画を観てもらい、演技や読み方までいろいろとコメントを入れた。

それから十年ほど経った頃、文体論の権威東田千秋先生のご紹介で、須賀有加子氏が英文学科に加わった。彼女は想像力に富んでいて、意志強固な人柄で、ロンドンに旅をされた時、有名なイギリスの女流作家マーガレット・ドラブルのフラットを唐突に訪ね、結果は帝塚山学院大学を中心に関西の女子大学で連繋して講演会を催すことになった。会は大成功で、他大学のある先生は、「要点、要点でうなずいたり、くすっと笑ったりする学生さんの多いことに感心した」と漏らしておられた。

須賀氏にいつしか感化された私も、伝統のある「オベロン会」の会員にしてもらい、何度も発表させてもらったし、上智大学に特別研究員として安西徹雄先生のチュートリアルを旧赤坂プリンスホテルのラウンジで受け、また院生対象の講義にも出席した。また、ピーター・ミルワールド先生にも個人的にいろいろとカトリック関係のことを教えて貰った。

よき友を得るということは人生の幸運というが、「関西シェイクスピア研究会」で会員の藤田實先生に出会った。氏はグローブ座の建築には、古代ローマのヴィトルヴィウスの建築の哲学の感化があるという立場に立

っておられたが、豊かなシェイクスピア世界の読みの深さと閃きに啓発された。先生には、狭山キャンパスにも特別講演という形式で何度も招聘して、私の足らざるところを補っていただいた。

私の処女作は『陰翳と変容のドラマ』と題して研究社から出版した。シェイクスピアの悲劇も喜劇も単純なようで、底が深い皮肉な劇作家で、舞台の視覚的なものも象徴として巧みに使っている点を論じたもので、『朝日新聞』系の新聞の書評が出た。第二著は『シェイクスピア劇と図像学』で、これは、日本演劇学会から「河竹賞」を受賞した。河竹木黙阿弥のご子孫が設けられたもので、その年の最優秀の演劇に関する著作に授与されるもので、ノーベル賞でも貰ったかのように嬉しかった。

いずれにせよ、帝塚山学院大学の学生は、総じて芸術に対して反応がよかった。歌舞伎や能や俳句やお花やお茶に親しんでいる人が多いせいではないかと推察する。定年が迫ってきて、関西外大の博士コースの指導教授になったが、71歳でやめた。その後、狭山キャンパスの「生涯教育」のコースで、シェイクスピアを中心に15年ほど講座をやらせてもらった。英文学の面白味の分かる人もいて、楽しい講座であった。

脱線気味だが、最後に、私がどうして大学の英文学科を選んだのかを述べさせて貰う。当時の同志社の英文学科は、語学に強いので評判が高かった。しかし、さて入ってみると訳読と文法や語法には力が入っていたが、小説や詩の技法やテーマやモチーフについては、あまり力が入っていなかったような気がした。私は英文学科である以上、もっと技法や構成やアイロニーなどを語ってほしかった。私は、もし自分が大学の教師になったらもっとその点にも力を入れた刺激的な授業をやってみたいという夢、いや志を抱いた。

有名な『ジェイン・エア』もただ訳読しているのではつまらない。その一例だが、「白馬の王子」のモチーフを巧みに使った例を挙げてみよう。ジェインという娘は孤児院で教育を受け、家庭教師（ガヴァネス）の口が見つかり，赴任の途上、とぼとぼ歩いていると、馬に乗った紳士が追い抜いて行った。馬は彼女の存在に驚いて騎手を振り落とした。紳士は足を痛めたらしく、結局彼女の手を借りて馬で去っていく。実はこの紳士は彼女が訪ねていく大きな屋敷の主人であることがやがて分る。この小説は、馬を飛ばして行く元型的モチーフの変奏であった。若い女性の心の底にひそんでいるもので、伏線として使われていたと読める。この小説の最後の部分では、不思議な彼女を呼ぶ声に誘われて、この屋敷にもどってみると、大きな屋敷は焼け落ち、目も見えなくなった紳士がよろよろと現われ、二人はついに目出たく結婚するのである。足をくじいて助けたときのモチーフが、照応・変奏されている。

シェイクスピアには、もっと深いモチーフが沢山ある。「群衆心理」の怖さも、その例で、『ジュリアス・シーザー』や『コリオレイナス』のあちこちに見当る。シェイクスピアは決して集団リンチのようなやり口にはノンだったのだろうと読める。ここでは、これらの劇は割愛する。

こだはらの丘で英文学教師でありつづけたことを誇りとしている。

今は自宅の座敷にさしこんでくる月光を眺めては、あの狭山キャンパスでの「月見の宴」を想い出すことがある。

アメリカ・カナダ冒険旅行

名誉教授
川上　与志夫

私が勤務していたころ、狭山キャンパスは女子大だった。女子だけの環境では視野が狭い。「人生は冒険だ。飛び出さなくてどうする」と、私は学生にはっぱをかけた。目に輝きがなく、顔が暗い学生もいる。非日常の新鮮な体験こそ、彼女たちを解放するだろう。私は「アメリカ・カナダ冒険旅行」を企画・実行した。

アメリカの友人に、ひとりでバス観光旅行をやっている好人物がいた。彼と二人ですべての旅程を企画した。驚くほど安い費用で、２週間の旅行が始まった。学生２４人のほかには運転手と私。５０人乗りの大型バスには、十分なゆとりがあった。

まずは、ロッキー山脈での急流下り。清涼な水しぶきを浴びながら、だれもが歓声をあげた。つづいて、大きな湖でのパラセーリング。この人間凧揚げ、水上８０メートルまで舞い上がる。スリル満点だ。カナディアンロッキーでは、乗馬で山麓を巡り、川を渡る。バンフの街並みでの買い物も、珍しい物ばかりだ。

友人の持つロッジでは、大西部の巨大なステーキのバーベキュー。翌日は、アメリカ先住民との交流。平原にティーピィー（三角テント）を自分たちで建て、テントの中の焚火を囲み、コヨーテの声を聴きながらの談笑。あちこちの街で泊まったモーテル。ひなびた店でのハンバーガーやピッツア。すべてが非日常の世界。４人の学生は、飛行機から飛び降りるスカイダイビングまでやってのけた。帰国後、その学生の母親から電話。

「いつもはしゃべらない娘が、夢中になって旅行の話をするんです。参加できて、ほんとうにうれしいです。」

狭山キャンパスはこれから後も、今の私に、今の世界に、つながっている。さあ、勇気をもって飛び出し、青春の賛歌を奏でよう。

無料喫茶店になった研究室

名誉教授
川上　与志夫

学生にとって、教師の研究室は敷居が高い。世代間の断絶が気になった私は、思い切った行動を企画し、研究室のドアに看板を貼り付けた。

無料喫茶店　　お菓子食べ放題　　ジュース・コーヒー・紅茶飲み放題
ただしセルフサービス　　差し入れ大歓迎
開店日時＝火曜２，４限：水曜の２，３限：木曜１，３限

授業中にも宣伝したら、いきなり大繁盛。三々五々、好みの菓子をもってやって来た。もちろん、手ぶら組もいる。ポットも冷蔵庫も忙しくなった。ちゃっかり組は、私が大事に使っている、アルコールランプのサイフォンを取り出し、ブクブクとコーヒーをいれる。贈り物の高価な和菓子や洋菓子を差し入れてくれたのは、どこかのお嬢たち。「先生、一緒に食べましょ」と、ケンタッキー・フライド・チキンをバケツで持ちこんできた猛者もいた。

私も仕事をやめて、雑談に加わる。話題は教授たちの授業のこと、男性観や結婚観、喫茶店やレストランの品評、タレントの評価、友人との軋轢、家庭内のいざこざ等々。どれも耳新しい。世代間の断絶を実感した。

うれしかったのは、これをきっかけに、気になっていた学生たちが深刻な相談を持ちこんできたことだ。無料喫茶店は、思いがけず「駆け込み寺」になったのだ。在日韓国人の学生の被害妄想に、私は衝撃を受けた。何度も話し合って、明るくなった彼女に私は救われた。

喫茶店が縁になって、志摩市にあるわが家にも数組がやってきた。心置きなく談笑すること。ここにこそ教育の原点があるのではないだろうか。

私と狭山キャンパス

名誉教授・短期大学第十一代学長
鶴崎　裕雄

私が帝塚山学院大学の狭山キャンパスで授業を持ったのは昭和四二年（一九六七）のこと、西本三十二先生が学長に就任した時である。西本先生は「放送教育」に力を入れ、大学でもテレビを使う放送教育を実施しようとされた。それに対して教授会の反対があった。テレビを使う授業ということで、その時には高等学校の社会科の教師であった私に、大学の学監（副学長）の庄野英二先生から、テレビを使う放送教育の授業を頼まれた。もう六〇年も前のことで、授業の内容など覚えていないが、狭山キャンパスでの私の最初の授業であった。私の授業が始まると、西本先生の放送教育に激しく反対されたという吉井巌先生が私の授業には大変協力的であったことはよく覚えている。

この授業を機会に私は高等学校から短期大学・大学へと職場が変わることとなり、平成九年（一九九七）には最後の短期大学の学長を勤めた。その後、狭山キャンパスの文学部・泉ヶ丘キャンパスの人間文化学部・大学院の人間文化の授業を担当した。

平成一四年、私は定年を迎えたが、狭山キャンパスでは続いて一般市民向けの公開講座を担当し、大阪狭山市や堺市の住民の方々に歌舞伎や文楽などの古典芸能の鑑賞や『伊勢物語』などの古典文学の講読、日本文化史の講義を行っている。特に令和二年度はＮＨＫ大河ドラマに因んで、明智光秀や織田信長、豊臣秀吉たちの人物像を追っている。

令和二年、世界中が新型コロナに脅える一年となった。コロナ禍に見舞われて生活様式も変った。特に学校や大学の授業方法が変わり、ソーシャルディスタンスが求められ、リモート授業が行われている。私は、半世紀前、西本先生の授業で放送教育が重視されたことを思い出す。今では放送教育が改めて持ち出されることはなく、普通の授業とされている。コロナ禍云々によって、私には半世紀前の狭山キャンパスの授業が蘇ったのである。

狭山キャンパス（こだはらの丘）賛歌

文学部教授（平成二年度～平成十五年度）
中尾　芳治

一九九〇年（平成二）春、帝塚山学院大学に赴任することになり、折からの満開の桜に囲まれた狭山キャンパスを仰ぎ見た時の感激を今も忘れることが出来ない。

私が担当した「博物館学芸員課程」が毎年春に刊行する『博物館学芸員課程年報』の巻頭には、庄野英二先生が年報の創刊を寿いで贈ってくださった「こだはらは」の詩を掲げている。

こだはらは

庄野英二

こだはらは　みつのほとりの
すえつくり　たくみせし丘
みみはらの　もずのみささぎ
たたなわる　河内野の塚
こがねはゆ　自由のみやこ
うみからの　かぜもかぐはし

「こだはら（高祖原）」、「みつ（三都）」は、狭山キャンパスのある土地の古称である。世界文化遺産に登録された百舌鳥古墳群を望み、陶磁器の源流となる須恵器の一大生産地であった陶邑古窯址群の一隅を占め、古代最古の灌漑池狭山池に近在する狭山キャンパスは、文化・芸術の研鑽を目指した帝塚山学院大学にふさわしいキャンパスであった。こうした環境にも触発されて考古学を通じて学んだ「現地を訪ねて、現物を見る」をモットーに教職員や学生のみなさん、生涯学習講座受講生のみなさんと一緒に万葉の故地や各地の遺跡・史跡を訪ねた思い出は数多い。

文学部教授として一四年間、非常勤講師として九年間、合わせて二三年間をこだはらの丘の狭山キャンパスで過ごしたことになる。その間の多くの教職員や学生たちとの交流は私の後半生の誇りとなっている。

1992年9月
帝塚山学院大学美学美術史学科の学生と共に、西安・洛陽・北京を訪ねる。
洛陽龍門石窟奉先寺大仏の前で学生たちと。
（提供：中尾芳治教授）

2011年12月8日
私が、2011年度の「大阪市市民表彰（文化功労部門）」を受けた時、お祝いに集まって下さった教職員の皆さんと
（於南の「銀座アスター」）
（提供：中尾芳治教授）

1993 年 5 月 23 日
鉄野昌弘先生と「万葉散歩の会」を作り、
畿内の万葉故地を巡る。
飛鳥宮跡大井戸跡で。
（提供：中尾芳治教授）

2008 年 10 月 31 日
「生涯学習講座」のみなさんと
恭仁宮跡、山城国分寺跡など探訪。
（提供：中尾芳治教授）

1992 年
「博物館学芸員課程」の見学実習
京都国立博物館で
美学美術史科の受講生のみなさんと。
（提供：中尾芳治教授）

私と狭山キャンパス

リベラルアーツ学部長・教授
永草　次郎

狭山キャンパスは、もともと、コンクリート、煉瓦、ガラス、鉄によるモダニズム建築と景観を生かし自然な雰囲気のある、イタリア式あるいは英国式とも言える庭園から構成されていた。

帝塚山という都市文化の象徴の地から、文人の思想からの山河へのあこがれ、イタリア貴族のヴィラのごとくある、田園と山河に囲まれた静かで牧歌的な理想郷を求め建設されたと推測する。

ファサード（正面）をもたない、「ピロティ」「自由な平面」「自由な立面（正面がない）」「独立骨組みによる水平連続窓」「屋上庭園」などから、ル・コルビュジエ、その弟子、前川國男らのモダニズム建築の影響が熟してきた頃の良質な設計思想が見られる。1966年とはそういう時代であったのだ。

その後付属して増設された校舎にはそうした建築思想がない。創設の頃の、文人とモダニズムを両立させる帝塚山のハイセンスはそこには継承されなかった。日本全体にあった実学や功利への傾向がそこに反映されている。ポストモダンと多文化主義とも見て取れるという言い方もあてはまるだろう。

この学びの理想郷は、このたび21世紀の福祉文化を象徴する機関によって継承されると聞いている。この地のゲニウス・ロキ（地の霊）のなせる業であろう。

ロサンジェルスにゲッティ・センター（ゲッティ・ヴィラ）という巨大な芸術文化の拠点が1997年に誕生した。そこを訪れた際、ケーブルカーで山をのぼり到着する、周囲から隔絶したそのヴィラは、規模は違うが、狭山キャンパスとの類似を想起させた。日本にも、MOA美術館やミホ・ミュージアムなどアプローチが長い桃源郷のような文化施設がある。

大学の自慢をするときに、狭山キャンパスのような緑と図書はすぐには用意できないのだとよく言った。今そこに加えるならば、信じられないほど長い大階段の先だからこそ知のユートピアが形成されたのだと。

今後は、泉ヶ丘をはるかに見渡す新キャンパスにて、ネット時代の新たなるアプローチによって、帝塚山イズムは確実に継承されるであろう。

ありがとう、ヴィラ狭山。たまたま大好きなモーツァルトのレクイエムを聴きながら。

狭山キャンパスの韻致

リベラルアーツ学部教授
古田　富建

地方国立大から赴任してきた小生が狭山キャンパスに初めて訪れたのは2009年のことである。山頂に上がりキャンパスを見渡した瞬間、思ったのは운치가 있다（ウンチガイッタ）。風情がある、趣があるという意味だ。無機質な国立大のキャンパスと比べると、こじんまりとしているものの、女子大時代から続くのであろう、凛とした気品を随所に感じたものである。

狭山キャンパスには10年余りお世話になった。季節の移ろいを楽しむ高尚な人間ではないため、事務局や研究室、教室以外に足を運ぶことはほとんどなかった。そんな野暮な小生でも、狭山キャンパスについて思い出すことが二つある。

最も思い出深いのは、「高潔、謙虚、真実」の花言葉が学び舎にぴったりな金木犀の花の香りである。秋の夕暮れ時、家路につく開放感と相まって、キャンパス中に広がる甘く芳しい香りに酔いしれたものだ。香りと記憶は強くリンクすると言われる。金木犀の香りとともにフラッシュバックするのは、卒業していった学生たちの顔である。今後も金木犀の香りをかぐたびに、狭山キャンパスでの記憶が呼び起こされるのであろう。

金木犀に勝るとも劣らない記憶といえば、春の桜だ。キャンパスの至る所に咲き乱れる桜を眺めることは、毎春のささやかな楽しみであった。スマホに溜まった写真を見返して驚いた。昨年の感動などすっかり忘れたかのように、春を迎えるたびに見事な桜に心を奪われ、スマホカメラを向けていた。春の桜とともに、4年間見守った”卒業生“を送り出す嬉しさ半分寂しさ半分の複雑な気持ち、新生活への希望に燃える”新入生“を横目に身の引き締まる思いを繰り返してきた。そうか、翌春からは研究室から桜が拝めなくなるのか。そう思うと非常に残念である。

海外に向かって開かれた扉

リベラルアーツ学部教授
溝手　真理

帝塚山学院大学に英語教員として着任したのは30年前である。勤め始めた当初から、この大学の学生たちには海外がとても身近で、海外研修や留学の機会が潤沢に与えられているという印象を持ってきた。当初、大学は狭山キャンパスに文学部1学部4学科のみを有する小規模な女子大だった。その規模に比して外国人教員が多く、英語圏からの交換留学生もおり、「海外」を意識させる雰囲気がキャンパスにあった。交換留学生は常時4名がカナダのブリティッシュコロンビア大学とノーザンライツカレッジ、そしてニュージーランドのマッセイ大学から来ていた。キャンパスに居ながらにして国際交流の機会があったのだ。そして本学からは同数の学生がカナダそしてニュージーランドに留学していた。学生の海外留学に対する関心は高く、交換留学生選抜試験にはいつも多くの応募があり、競争が激しかったと記憶している。

夏期休暇になるとカナダ、イギリス、ヨーロッパ各国に、語学研修のみならず多彩な研修が出発していった。何十人もの大グループを教員が引き連れて海外に飛んでいた。聞くところによると本学には、開学間もなくから海外研修の機会があったという。海外旅行や英語研修ブーム到来をはるかに先取りして、贅沢な教育環境を提供してきたわけである。

国際交流が活発な大学という特色はその後も引き継がれ、私自身も幾度となく学生を引率してイギリス、イタリア、フランス、オーストラリア、マレーシアへ渡った。オーストラリアには協定校を探すために出張した経験もある。ゴールドコースト、ブリスベン、シドニーの複数大学を実際に訪問し、最終的にグリフィス大学と協定を結ぶことができた。以来、多くの学生が長期留学や短期研修で現地グリフィス大学に学び、交流を深めてきた。また、現地から客員教員を招聘し、本学の教育に長らく協力して頂いている。

その後、経済的発展のめざましい東南アジアに新たな協定校を開拓する目的から、マレーシアの首都クアラルンプールに出向き、多くの大学を訪問、見学したうえでKDUユニバーシティカレッジ（現、UOW Malaysia KDU University College）と協定を結んだ。そして大変ユニークな文化研修プログラムがスタートし、多くの学生が参加している。

大学時代に海外研修や留学を経験し、素晴らしい変化と成長を遂げる学生を今までたくさん見てきた。教員として大変嬉しく、誇りに思う。国際交流は大学にとって欠かすことのできない教育の一環であると強く感じる。狭山キャンパスは、広く本学の国際交流をサポートし続けた拠点であり、学生にとって海外への架け橋であったのだ。

私と狭山キャンパス

リベラルアーツ学部教授
安田　政彦

私が本学に奉職したのは、平成二年（一九九二年）で女子大文学部の時代でした。その頃は学生バブルで狭山キャンパスには多くの女子学生があふれており、第二食堂を作ろうかと議論もありました。緑の多いこぢんまりとしたキャンパスを大勢の女子学生が楽しく行き交いました。私にはその印象が強く、従って、狭山キャンパスのイメージは今でも女子大のキャンパスのそれです。また、大学教員として、研究者としてスタートを切ったこのキャンパスには大きな愛着があります。

はじめは通学バスが、E棟のあたりまで乗り入れており、そこに乗降場がありました。その後、G棟やE棟が出来、キャンパスも少しずつ変化しました。共学化して月日も経ちましたが、全体として緑の多い落ち着けるキャンパスであることに変わりはありません。特に桜の季節の狭山キャンパスはとても美しいと思います。その桜のもとに新入生を迎え入れる喜びは大きなものがありました。

この桜をはじめ、キャンパスの緑は、開学当初の教職員が手ずから植栽したと聞いています。そうした先人の苦労のもとに出来上がったキャンパスであるだけに、手放すことは大変に残念です。

なお、体育館の地下には女子大時代の遺物である女性立ち小便器が残されています。将来的には文化財にもなり得ると思うのですが、これも失われることになると思うと残念でなりません。

この一年はコロナの影響で狭山キャンパスも閑散としていた時期もありますが、やはり、このキャンパスには学生が集っている姿が似合います。キャンパスそのものはなくなるわけではないですが、もう、学生が集う狭山キャンパスを見ることが出来ないのは、本当に無念でなりません。

しかしながら、このキャンパスに三十年勤めることが出来たのは、望外の幸せであったと思います。これから別キャンパスで研究・教育に勤しむことになりますが、私のキャンパスはいつまでも狭山キャンパスであり続けるような気がします。

動物たちの思い出

リベラルアーツ学部教授
伊藤　かおり

私は2013年4月に専任教員として着任して以来、多くの時間を狭山キャンパスで過ごしてきました。まず印象深かったのが狭山キャンパスの緑の豊かさでしたが、関東地方の町育ちの私には、それまで教科書やその他の本、映像でしか見たことのなかったものが目の前で繰り広げられるようになるだろうとは思いもしていなかったのです。

狭山キャンパスでまず圧倒されるのが、正門を入ってすぐ目の前にそびえる133段の大階段です。まだ体力があった頃はそこを上り下りすることが多かったのですが、そこではたびたびタヌキだかアライグマだかを見かけました。そうそう、こんなものを見たこともあります。

ある夏の日、夕闇が迫った頃、帰宅しようとA棟を出て大階段を下りようとしたところ、階段を横切って激しくうねる銀色のホースがありました。こんな時間にお茶室かB棟の裏で水でも撒いているのだろうかと思いながら近づくと、実はそれは1メートル以上はあろうかというヘビが崖側からお茶室側に向かって移動しているのでした。ヘビはそのまま階段を横切り、茂みの中に消えていきました。

こういった驚きもありましたが、狭山キャンパスの自然、特に研究室から見る中庭の風景は私にとって安らぎでもありました。春は桜吹雪が舞い、夏は木の葉が生い茂って深い緑をなしています。いつだったか、キツツキが度々木の幹を叩きに来て、軽やかな乾いた音を響かせていました。冬になると、カラスが目の前で激しい縄張り争いを繰り広げます。研究室のあったA棟2階は、夏は涼しく冬は寒いので「狭山キャンパスの軽井沢」とも異名を取っていました。研究室からの眺めを気に入って、卒業間近のゼミ生が入り浸っていたことも良い思い出です。

狭山キャンパスはとても広く豊かで、私の発見できていない魅力がまだまだあるはずです。この自然が受け継がれていくことを願っています。

Sayama Campus and Me

Cory Koby, Associate Professor
Faculty of Liberal Arts

It was a very hot day in June and I had been travelling all morning from Sendai. It was my first job interview at Tezukayama Gakuin University. I had never been to Osakasayama and, having arrived at Kongo Station rather early, I decided to walk to campus and experience the sights and sounds along the way. After a nice walk in the humid Kansai heat I found the Sayama campus. I was thrilled to see such a beautiful campus, yet sad to know that in just 3 semesters this campus would close. This was the summer of 2019, and I soon thereafter received the good news that I would join the Tezukayama faculty in October. I am rather sorry that I only managed to teach a single semester at Sayama before the pandemic. I love the serenity and nature of this campus and will miss coming up here in the years to come. Though I only spent a little time teaching here, I became fond of the setting and location of this campus. My memories of Sayama Campus are rather few, but all of them are good. Memories of casually meeting students in the hallways and in the Smart Lab will remain in my heart, and I will treasure the memories of the few lessons I held in my single semester on campus. We were lucky to enjoy such a beautiful place. I hope that students remember their time on this campus fondly, as I surely will.

私と狭山キャンパス

リベラルアーツ学部教授
宮坂　康一

私が帝塚山学院大学狭山キャンパスに着任して、早いもので四年の歳月が過ぎようとしています。茨城県で生まれ育ち、関東を離れたことのない私にとって、大阪は初めての土地であり、戸惑うことも多かったように思います（今でも、多少の混乱は引きずっています）。

大学院を修了後、大学の非常勤講師、看護学校の専任講師を経験した後、帝塚山学院大学に着任した私にとって、狭山キャンパスにおける個人研究室は、初めて持った、自分の城でした。なにより嬉しかったのは、実家住まいの時は段ボール箱に入れて積み上げるしかなかった蔵書類が、背表紙が見える形で書棚に収めることができるようになったことです。それでもまだ空所の多い書棚を目にして、これからさらに蔵書を充実させていくことができることに、密かな喜びを感じたものでした。泉ヶ丘キャンパスとの統合に伴う引っ越しのため、蔵書を整理していますが、わずか四年間とはいえ、その量がかなりのものになっていることに驚かされます。私の好奇心が、個人研究室を得たことで従来以上に広がっていたのだと感じます。

この個人研究室を拠点にして、多くの学生たちとの、苦しくも楽しい日々を送っていくことになりました。初めての専任教員としての職務を通して、非常勤時代とは違った、様々な経験を積んでいくことになりました。まだ経験に乏しい私を、先輩教員の皆様も、学生達も、温かく迎えてくれました。この四年間は、私のこれまでの人生の中で、最も濃密な四年間だったように思います。その間に得た多くの経験は、改めて泉ヶ丘キャ

ンパスでの職務において活かしていきたいと考えています。自分の城を含めた、狭山キャンパスから離れることに、一抹の寂しさは覚えますが、顔を上げ、前を向いて歩んでいこうと、決意を新たにしています。

記憶の地層の色

基盤教育機構教授
川越　菜穂子

父の葬儀の際、葬儀屋から父の思い出を書いてくださいという依頼を母は「そんなの書けない」と断りました。葬儀屋が差し出した用紙を見ると、思い出を書く欄はほんの数行。50年以上もいっしょに暮らした思い出をそこに書けというのは無理だと母は思ったのでしょう。あるいは文章を書くのに慣れない母が、単に面倒くさいと思っただけだったのかもしれませんが。

狭山キャンパスの思い出について書こうとして、そんな母のことを思い出しました。私がはじめて狭山キャンパスに来たのは1989年です。ベルリンの壁が崩壊し、日本では平成という時代が始まった年です。時間が長すぎると、いろいろな思い出がつぎつぎと積み重なり、記憶の地層の奥深く埋もれて、何か思い出そうとしても取り出すことができなくなります。特別に思い出深いことがあるだろうかと考えても、どれも日常の濃淡に埋もれておぼろげです。

ただ、そんなおぼろげな記憶たちの中で、心地よい色を帯びてよみがえってくる光景は、研究室で学生たちとお茶にお菓子をつまみながらした授業やおしゃべりです。窓の外には、中庭に何本も植わっている大きなニセアカシアの木の緑があふれていました。

新型コロナのためにすべての授業が遠隔となり、最後の1年は研究室で授業ができなくなりました。引っ越しのために研究室を片付けてみると、あきれるほど古い書類や昔の学生の手書きのレポートやら答案用紙やらが山のように出てきました。こんな授業をしてたんだと思ったりし

ます。いわば記憶の地層のインデックスです。ただでさえ古いことをすぐ忘れる私です。昔の学生たちの名前を見ながら、これを捨てるともう思い出せなくなりそうだと思いました。少し寂しくもあり、また申し訳ない気もしました。でも、片付けないといけませんから。

本当に長い間、ありがとう。

私と狭山キャンパス

基盤教育機構教授
杉本　雅子

着任当初、研究室不足で溝手先生とA棟3階の研究室をシェアするところから、私の狭山キャンパスライフははじまった。2人とも”教養課程“の所属、心理的にもスペース的にもやや肩身が狭かった。その後どういう経緯だったか、おそらく「部屋がありますが引っ越されますか？」というような提案があったのだろう、ともかく引っ越すことに。引越し先はA棟110室。番号を聞いて、この場所がわかれば狭山キャンパス通。今は、博物館資料の置き場として”収蔵室“などというもっともらしい名前をいただいているようだが、要は物置。天井は斜め、窓の外には巨大な室外機。事実上開かずの窓だ。

その後、”本物“の研究室が空いたということで再びA棟3階、最初の部屋のお隣に。落ち着いたのも束の間、大学再編で全員が学科所属となり国際文化学科に移籍。着任当初から国際文化学科中国文化コースの仕事もしていた私に仕事上の大きな変化はなかった。一番の恩恵はF棟3階の広い角部屋をいただけたこと。当時のこととて、合同研究室にはコピー機もあり、助手さんもいた。これぞ大学教員生活である。F棟というのは図書館のある建物だが、正面から入る図書館に対し、裏から入るというのもまた楽しかった。何せ緑が満喫できる。泰山木の大きな白い花、漂うハリエンジュの香りーーただし緑の恩恵には”ムカデ“の登場というおまけも。機器だらけの合同研究室にはおよそ相応しくない”火バサミ“。それはムカデさんに友好的にご退場いただくための必需品だった。

さて、大学にわんさか受験生が押しかけていた時代が過ぎ去り、文学部

は一本化、学科を失ったF棟住民には退去命令が出され、私は4度目の引っ越し。やれやれ現在のA棟2階がついの栖、と思いきや、大誤算。4月から泉ヶ丘キャンパスの住人になる。かくして、今、大好きな狭山キャンパスの思い出を書いているこの私、キャンパス内引っ越し部門で学長表彰？？

鳥と緑のキャンパス

基盤教育機構教授
福島　理子

講義の途中に話しを止めては、鶯の鳴く声に耳をすませる。鶯の鳴くのは春先かと思っていたのだが、キャンパスでは初夏を過ぎても聞こえてきた。

正門近くの石畳のあたりでは、黒い尾のピンと伸びた小鳥が、チョンチョンと歩いているのをしばしば見かける。鳥が好きなのに、ちっとも鳥の名前を知らない私に、川越先生は、鶺鴒（せきれい）だと教え、さまざまな鳥の詩を集めた本を手渡してくださった。

横川先生の部屋の前には、啄木鳥（きつつき）が巣をかけていて、雛たちが親の帰りを待っていた。くちばしを広げて親鳥を迎える姿を収めようと、横川先生が本を置いて、日がな一日カメラを構えておられる姿を見かけることもあった。

校舎裏の竹やぶから筍を掘って、袋いっぱいに届けてくれたKくん。卒業したはずのSさんが、タオルを首にかけスコップを手にして歩いているところに出くわすこともよくあった。家のベランダに咲いた花を、キャンパスの片隅に植え替えていたらしい。

美しい自然に育まれたキャンパスだった。そして豊かな心を持つ人々の集っていたキャンパスだった。

ここで教える最後の漢文学概論のテーマには、鳥を歌う詩を選んだ。

狭山キャンパスと私

基盤教育機構教授
三村　浩一

私が狭山キャンパスで勤務したのは2017年４月から2021年３月の５年間で、キャンパスの閉鎖と退職が奇しくも重なりました。1993年４月から2017年３月までは、泉ヶ丘中学校高等学校に勤務しており、キャンパス統合を含めた大学の改革問題には学院内に身をおく者として関心を持っていましたが、統合するのであれば、泉ヶ丘よりも敷地が広く、緑豊かな狭山にすべきではないかと常々思っていたので、泉ヶ丘統合は様々な事情があったにせよ、狭山キャンパスの閉鎖は残念至極です。

実は、狭山キャンパスを初めて訪れたのは40年前ごろです。はっきりした日時は覚えていませんが、ある研究会が狭山ャンパスで開催され、当時大阪府立高校に勤務していた私が参加したのです。小高い丘の上の瀟洒なキャンパスと、Ａ棟４階から眺めた郊外の風景は今も目に焼き付いています。その数年後には、河内長野で開催された研修会の帰途にメンバーの案内で、泉ヶ丘中高を見学したこともあり、学院との不思議な縁を感じます。

狭山キャンパスの５年間はキャリア英語学科の教員として、教育・研究・校務で忙しい生活を送り、ゆっくりキャンパスを楽しむということはほとんどありませんでしたが、研究室から見える春ごとの桜は目を楽しませてくれました。Ｆ棟の設備は授業の助けになりました。また図書館は充実しており、英語関係の書物や学会誌の充実ぶりには目を見張りました。さらに、学内の廊下に示されている庄野英二の作品には京都弁で言うところの「ほっこり」しました。

狭山キャンパスは自然に囲まれ、文化の香りに包まれたアカデミアだったと思います。ゆったりとした環境の中でこそ、学問・教育が育まれるものと信じています。最後に、泉ヶ丘キャンパスもそのような環境を実現することを強く願っています。

私と狭山キャンパス

基盤教育機構教授
薬師院　仁志

個人的な思い出を語ることは、あまり好きではない。ただ、私が狭山キャンパスに赴任したのは、1995年の４月のことであった。この日付だけは、記憶から消えることはないだろう。同じ年の１月に阪神淡路大震災があり、３月に地下鉄サリン事件が起きた直後だからである。当時の先輩教員の中には、震災によって神戸市の自宅が全壊した方もあった。私自身もまた、数週間で復旧したものの、借りていた１ＤＫの賃貸マンションの水道管が切れ、少しばかり不自由な生活を余儀なくされた。おそらく、帝塚山学院の学生たちの中にも、何らかの被害を受けた者もいたに違いあるまい。

そうした中にあっても、狭山キャンパスで目に映る光景は、至って平和であった。そして、明るい雰囲気であった。もちろん、それ自体は喜ばしい状態であるに違いなく、私自身にとっても幸運な状況であった。あれから何年が経ったのか、改めて数えてみることもあるまい。狭山キャンパスという物理的な存在がどうであれ、帝塚山学院大学は存在し続ける。そして、私自身もまた、これからも現役の学者として、以前と変わらず研究を続けてゆく。だが、いつか必ず、力が衰えて引退する日が来る。そのときは、終えた長旅の中で見た景色のように、このキャンパスが懐かしい思い出になるかもしれない。それでも、最も大切なことは、単なるキャンパスではなく、そこで出会った人間の思い出だろう。そして、それもまた、誰かに語るものではない。皆それぞれ、自分の思いを持てばいい。

大階段

教学企画センター　センター長
澤田　悟

2020年5月に撮影した大階段です。
丘の上のキャンパスのシンボルでした。

E棟の校章

教学企画センター　センター長
澤田　悟

2020年5月に撮影したE棟外壁の校章です。
E棟は1998年の新学部開設時に増築され、20数年が経過しましたが、
今も変わらず美しい教室棟です。

G棟ベランダ

教学企画センター　センター長
澤田　悟

2020年12月に撮影したG棟5階ベランダからの風景です。
狭山キャンパスはどこにいても緑が見える、穏やかで居心地の良いキャンパスでした。

思い出をいつまでも

教学企画センター教学課
田中　雄之

私は今、帝塚山学院大学の職員として働いています。そして、卒業生でもあります。

とは言っても人間科学部の卒業で、メインは泉ヶ丘キャンパスでした。このような機会がなければ、わざわざ狭山キャンパスに想いを馳せることはなかったかもしれません。ありがとうございます。

狭山キャンパスと言えば、複数の校舎棟に、開放感のある中庭。これぞ大学！という印象で、リベラルアーツ学部の学生を少し羨ましく思っていました。

授業を受けたのは1回生の語学の日だけ。初めての英語の授業は、ネイティブの先生の言葉がほとんど理解できず。終了のチャイムと同時に、周囲と一斉に顔を見合わせ、「みんなで力を合わせて単位を取ろう」と、謎の結束が生まれました。その内の数人とは今でも交流があり、結婚式にも招待してもらったほどです。

大学生らしい恋の記憶も、なぜか狭山に眠っています。お相手がこれを読む機会があっては大変なので詳しくは書けませんが、キャンパス近くのうどん屋さんは、きっと忘れることのない思い出の場所だったりします。

いちばんの思い出は葡萄祭。3年間、実行委員の一員として活動していました。本番を終えた夜、真っ暗なステージの前に、仲間たちと円になって座る。その場を離れるのが名残惜しくて、いつまでも喋っていた気がします。この文章を書きながらも、あの時がいちばん青春してたなぁ…なんて、自然と頬が緩んできました。

振り返ると意外にもたくさんの思い出があった狭山キャンパス。実はまだまだエピソードがあって、泉ヶ丘で大半を過ごした私ですが、今さら寂しくなってきてしまいました。

2021年度からは改修の進む泉ヶ丘キャンパスに統合されます。ひとりの卒業生として、新たな泉ヶ丘キャンパスも、後輩たちの心に残るキャンパスになることを願います。

そして、ひとりの職員として、新たな泉ヶ丘キャンパスが皆さんの心に残るよう、より魅力ある大学を目指して頑張ります。